

揺籃

『山茶花』
83-1号

背後かすかに吹く風よ杳き日の揺籃に似て温かきかな

石路の花をめぐれる黄の蝶や午後の退屈をまぎらはさむ

この夜長とつとつと屋根をうつ雨音ふる里の訛りの如くきく

何時の日も皺ばむ貌を蔑みてつねに伏せ置く赤き手鏡

老ゆるとは哀しきものよ朝なさに有るか無きかの髪梳る

香を焚く

『山茶花』
83-2号

彩るは朝のスープのブロッコリー顧りみればわが冥き青春

霜の朝古きコートを捨てにゆく重たき未練携へながら

佛間に坐しひとり謔かに香を焚く弔はれたきは吾かも知れず

月光に覚束なき身の影おとし逝きたる人らに待たるる念ひ

紺碧を互みに牽き合ふ空と海無限大と言ふ想ひに至る

冬の夕映え

『山茶花』
83-3号

さはやかな朝の空気に馴染みつつ刻むキヤベツはほのかに甘し

寒々と窓のガラスは磨かれて冬去りがたく春が待たるる

いささかの狂ひもあらず刻きざむ古き時計と日々を営む

無名にて畢るひと世か輝やかな慈愛に充てる冬の夕映え

またしても冬の訪れ夢にまで急かされて編む毛のセーター

暖炉

『山茶花』
83-4号

冷えびえと居間の暖炉に火の氣なく帰り来たれどつくづく孤り

春ながら未だ小さき露の臺おくるみに眠れる赤児のごとし

ベビー車押しゆく後背たくましき孫はいちじ一児の父となりたり

多数決ならば諾はむ沈丁花ほしいままなる芳香放つ

父も亡く母も在まさざれば灯の下に新聞広げ夜の爪切る

珈琲

『山茶花』
83-5号

雪洞に淡き灯ともす籬の宵つよがりながら独りの吾か

累ねるし無為なる日々よ存らへて生きゐることも或ひは不遜

決めごとの多きこの世に存らへて恙なく渡る青き信弓

この自在何に譬へむ貧しくも朝ひとときの珈琲に足る

もろもろの言葉の余韻残りしか取り払はれし電話ボックス

乳母車

『山茶花』
83-6号

三・一一夢かうつか幻かりモコン握りで茫然と立つ

信号を渡りきるまでの昂りは抱へ持つ卵のためにもあらず

幌立てて行く乳母車杳き日の吾子かと思ひ孫かとも思ひぬ

存らふは罪科に似て杖にさへ支へられずして徑に蹠踉めく

とりとめもなく存らふは何んの意味天秤座の身に散りくる桜

夜の花舗

『山茶花』
83-7号

数知れぬ命攫ひし大津波海は魔の器と化せしか

災害は思はぬ時に来るものと祖母は語りき母も語りぬ

たつぷりと物濯ぐさへ憚りて水は泪のごとく流るる

はがらずも哀しき態を見て仕舞ふ押しただきて食を享くるを

桜花咲けど誰もが冥き三月よ鞭打つごと老いの軀に降る雨

被災地の明日は雪との予報よこの世の神々なべて不在か

いつさいを失くせし媪笑ふよりほかなきとその笑ひ切なくて

老ふさは尽きることなき夕べにて雨に濡れたるきざはし昇る

花待たず逝きたる人の弔ひにたどたとわが先行き近からむ

夜の花舗いたくひそけく灯りゐることごとく喪の花と見て過ぐ

鎮魂

『山茶花』83-8号

昼の花舗あはく灯りてうらがなしなべて鎮魂の花と飾りたし

初夏の風そよと吹くたそがれを啼き衰へぬ鶯の声

夜の闇にくつきり白き哉菜の小花が放つ気魄におののく

球となし咲くゆゑいとほし紫陽花に容赦もあらず雨降りそそ
ぐ

つくづくと生き存らへて何の甲斐いよよ色濃き雨後の紫陽花

夏うぐひす

『山茶花』
83-9号

身近にて啼くゆゑわれも呼忘せり夏鶯の張りもつ声に

庭樹々のみどり菟めて風を喚ぶあと幾度の夏迎ふるや

誰かにか逢ひたくなりし雨の午後この世に在らぬ人の名喚ぶ

灯りゐて明るき書房に捜しゐるわが往く先の地図見当らず

燈を消して月の光りのひとり占めやがて往く途もこの明るさに

カンナ

『山茶花』
83-10号

明日は明日生きゐる証の残暑見舞誤字脱字の多くは許されよ

生涯の軀の綻び繕はむと先づ針刺の針の錆を研ぐ

苔もち身の丈ほどに立つカンナ明日とは言はず今日咲かせたし

忘れたき過去などあらぬさはやかさ朝は朝顔夕べの夕顔

次々と友らは先立ち遺されて拙くわれは独りを託つ

蝉の声

『山茶花』
83-11号

事のなきこの日常の明け暮れの後ろめたさは日に日に募る

捨てるゴミと共ども捨てたきわれかとりとめもなく生き存らへて

夢に逢ふ入らは皆若々しくつくづく吾れの老いたり朝の鏡に

しつかりと耳に止めおく蝉の声再びの夏ありやなしやと

高処よりわれを見下すおろタガラス杖に立つ身を哀しむなゆめ

夕 茜

『山茶花』
83-12 号

立ち枯れの向日葵をつつむ夕茜われに如何なる明日が展かれむ

朝顔は怠りもなく咲きつきぎて紅の絞りは老いの目に鮮し

炎天下蟻の背負へる荷の重さ量りがたくして臆て見失ふ

生き残りの蟬が棲みつきしかざわざわとわが耳鳴りの騒がしきま
で

存分に生かされし軀には悔いもなし明日を耀やかす秋の夕映え